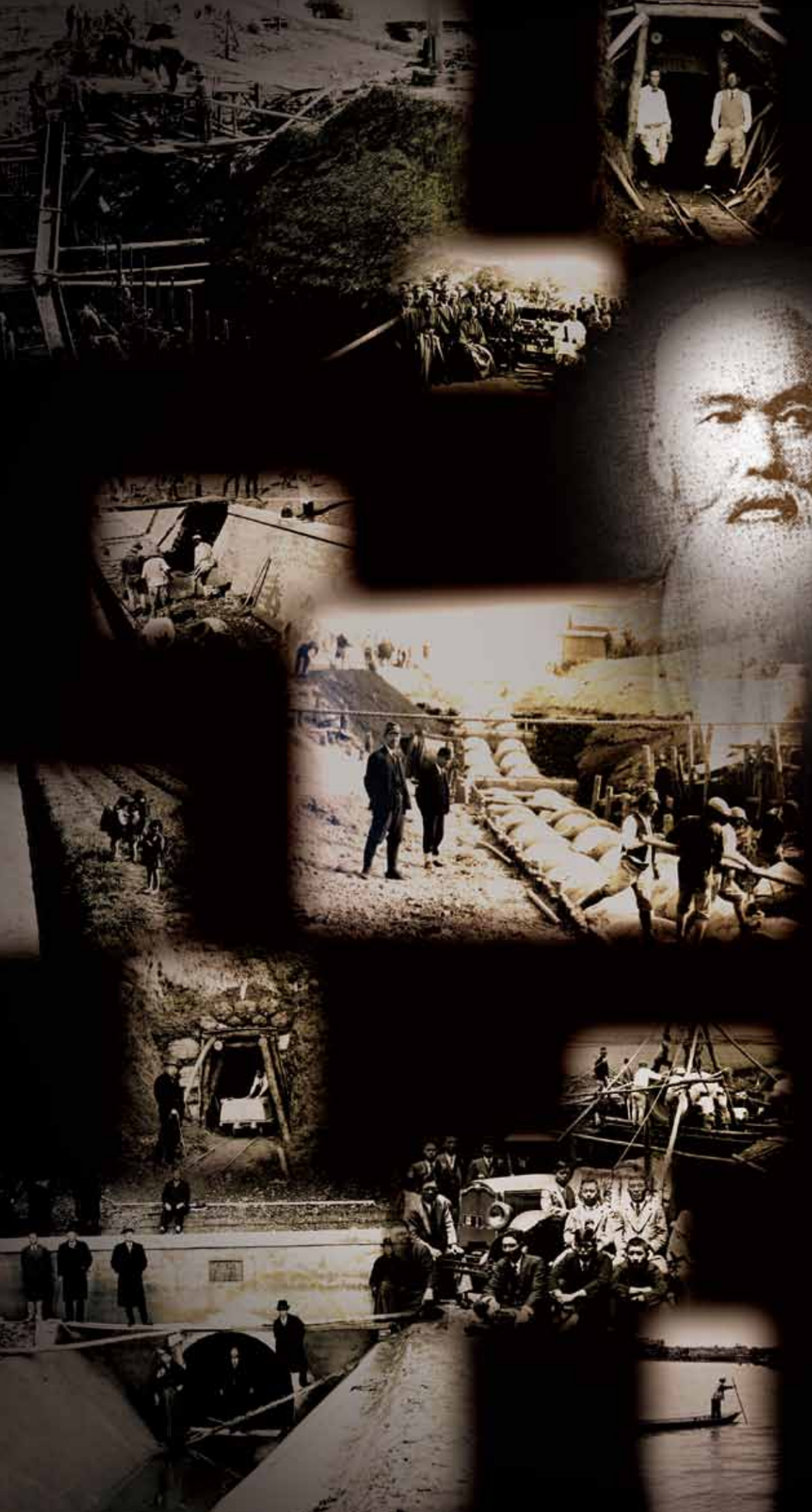


磐南平野の金字塔

Monumental Achievement of Bannan Plains

用水に尽くした人々

足立孫六（菊川市丹野出身）
周智郡長として明治期の社山疏水工事の実現を主導。工事中止後も殖産興業、特に道路建設に尽力。「道路郡長」とも呼ばれた。

大橋亦兵衛（磐田市小立野出身）
磐田用水の実現に際して県議会議長として尽力。平野睦則、石川類平、岡本保次、相場彰太郎らと磐田用水期成同盟会を設立する。

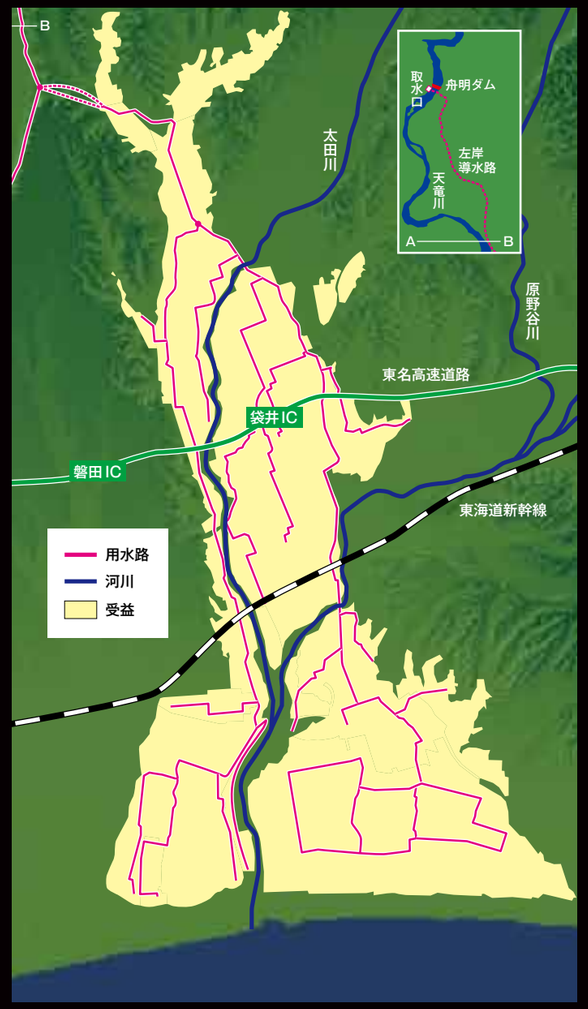
金原明善（浜松市安間出身）
突出した財界人でありながら無私無欲、一生を天竜川の治山治水に捧げた不世出の巨星。彼の遺徳は磐田用水に多大な恩恵を与えた。

江塚勝馬（磐田市向笠出身）
磐田用水水利組合主事に三顧の礼で迎えられる。磐田用水実現に向けて最も困難な仕事を背負い、20年間、組合のために尽力。

鈴木信一（浜松市和田町出身）
金原明善の片腕として数々の仕事に従事。明善亡き後、金原治山治水財団理事長として活躍。磐田用水へは地元負担分全額寄付の美挙。

鈴木正一（磐田市豊田出身）
富岡村長、県信連理事、県議会議員、寺谷用水組合管理者を歴任。磐田用水土地改良区連合初代理事長として10年にわたり活躍。

竹山祐太郎（磐田市見付出身）
農商務省時代、磐田用水を指導。後に静岡県知事として天竜川総合開発事業の実現など、静岡県の治水・利水に大きな足跡を残す。



現在の磐田用水

磐南平野の金字塔（ばんなんへいやのきんじとう）

Monumental Achievement of Bannan Plains

企画・制作：水土里ネットいわた用水
制 作 協 力：㈱オルタナティブコミュニケーションズ

水土里ネットいわた用水
磐田用水東部土地改良区

〒437-0043 静岡県袋井市新池 3001
TEL：0538-42-3175　FAX：0538-42-3176
E-MAIL: iwatalid@d2.dion.ne.jp

【第一章】

磐南平野の宿命

現在の磐南平野

馬伏塚城跡

馬伏塚城の謎

馬伏塚城（袋井市浅名）は徳川家康が武田軍の高天神城（掛川市下土方）を攻める際に、岡崎城、横須賀城などとともに重要な役目を果たした城です。

戦国時代は山城が普通であり、高天神城も一三〇mを超える険しい山の上に築かれています。しかし、岡崎城、横須賀城とも標高二、三〇mの平城、馬伏塚城跡にいたっては一〇m程度の小さな丘に過ぎません。

どうして、このような平坦な地に城が築かれたのでしょうか。

その訳は、六千年前のこの平野の地形に由来します。縄文時代には海面が今より五メートル程高く、平野のほぼ全域、掛川市あたりまでが海の底でした。そして弥生時代になると徐々に海面が下がり、陸地は広がります。

ところが、海岸近くに川からの土砂が積もるなどして砂丘ができると、平野のくぼんだ部分は沼や湖として残されてしまいます（潟湖）。

図1は奈良時代の地形の推定図ですが、驚くべきことに、江戸時代中期の古図にもほぼ同じ潟湖が描かれています（図2）。旧浅羽町には、江戸時代中期まで広大な潟湖が残っていたのです。

つまり、馬伏塚城、岡崎城、横須賀城とも周辺は湖に取り囲まれており、充分に城の役割を果たしていたというわけなのです。

極端な低平地

海が残るくらいですからこの平野は極めて平坦です（正確に言えば、すり鉢状に凹んでいる）。雨が降るたび、川は流れを変え、濁流となって平野のあちこちを乱流していたものと思われます。

ちなみに袋井市に入ってからの原野谷川の勾配は約一五〇〇分の一*。一・五kmくだってようやく一m下がるという緩やかさです。

図1の原野谷川と太田川は現在の流路とは異なっていますが、両河川とも土地が平らであるゆえに著しく蛇行していたのです。

宝永地震（一七〇七年）や安政東海地震（一八五四年）で地盤が隆起し、潟湖はようやく姿を消しますが（磐田駅南の「大池」は現存）、地形そのものは太古のままであり、昔水域であったところは今も海抜〇～一mのままなのです。

こういう地形の大地に大雨が降るとどうなるでしょうか。言うまでもなく水浸しです。普段でも田の悪水（排水）に悩まされてきました。

今之浦湖の跡地（磐田市）は「十年一作」（十年に一度しか収穫できない）と言われるほどの劣悪な湿田でした。あまりのひどさに、六貫野という村は六貫文をつけて土地を与えたのが由来だそうです。

「新池 彦島 松袋井
雨が三粒 降りや花筏」

江戸末期、赤貧の極みにあった三つの村を詠んだ唄です。花筏とは花が筏のように川面に浮き流されること。少しの雨でも田植え前の苗が流されたり、洪水で収穫近い稲がやられたりすることも度々でした。

磐南平野の下流は、ほぼ全域が実に昭和時代まで洪水や田の悪水に悩まされ続けてきたのです。

致命的な水不足

一方、洪水や悪水と矛盾するようですが、それ以上に磐南平野は水不足に苦しんできた地域でもあったのです。

これは太田川や原野谷川（ともに二級河川）の水量の少なさに起因します。通常、水田が川から安定した流量を得るためにはその水田面積の一〇～二〇倍程度の流域面積が必要だとされています。

太田川水系（原野谷川含む）の水を引いていた水田の総面積は約一万五千ha。対して同水系の流域面積は約四万九千ha。わずか三・三倍に過ぎません。

村々は川から次々に水路を引いて、競うように水田を増やします。水路は増えに増え、江戸時代の後半には三〇ヶ所の取り入れ口がひしめき合うという事態にいたるのです。水争いも凄まじく、この地方にはおびただしい記録が残っており、江戸での裁判になった例もたくさんあります。少ない水を求めて村同士が争いあう。この水地獄とも言うべき深刻な事態は数百年も続いたのです。

極端な低平地と川の水量の少なさ。この二つが磐南平野の地形的な宿命でした。

県下一の水田王国

さて、現在の袋井市、磐田市は下の表が示すように、静岡県を代表する穀倉地帯です（周智郡森町も水田率五〇・二%）。

まさに奇跡の進展ぶりです。

いったいどうやって、先人たちはこの地形的宿命を克服してきたのでしょうか。

ここにいたるには人と大地との凄まじい闘い、何世紀にも及ぶ壮大なドラマがあったのです。

*袋井市愛野地点における原野谷川の標高は約九m。同地点から河口までの距離は約一三、九〇〇m。したがって勾配は約一五四〇分の一。

順	市町	水田(ha)	水田率(%)
1位	浜松市	2,640	20.5
2位	磐田市	2,360	50.8
3位	袋井市	2,350	67.9
4位	掛川市	2,180	39.9
5位	菊川市	1,120	35.6

出典：農林水産省ホームページ

図2：1686年<江戸時代>に描かれた古図

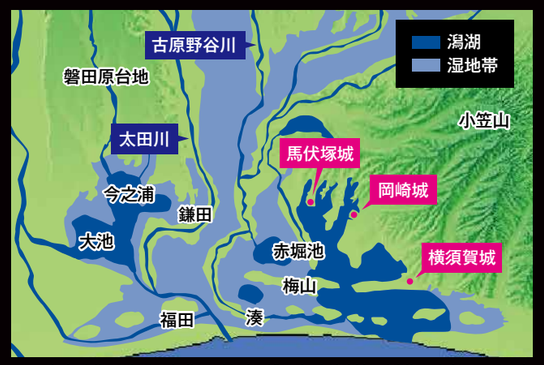


図1：奈良時代の地形の想像図（参考：浅羽郷土資料館・近藤記念館のパネル）

【第二章】大地の改良

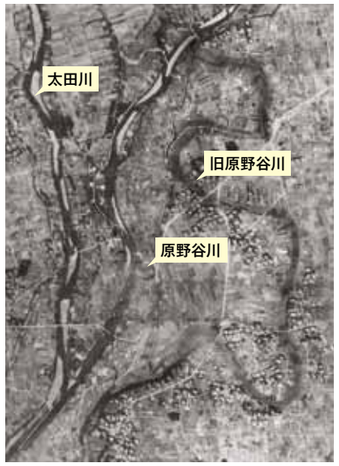
太田川と原野谷川の合流

農民にとって最も恐ろしいのは何と言っても洪水でしょう。しかし洪水を避けて高い土地に水田を造れば、（ポンプでもない限り）水を引いてくることは不可能です。利水（水を引くこと）と治水（洪水から守る）は矛盾するのが常でした。

この地に大規模な大地の改良が始まるのは、一六〇四年に行われた太田川と原野谷川の合流からです。

指揮した代官は徳川家康の家臣・伊奈備前守忠次。伊奈忠次は、家康とともに江戸に移ってからは、利根川の付け替え、運河や水路の開削など、当時、利根川の氾濫原に過ぎなかった関東平野を沃野に仕上げた天才技術者であり、今も関東各地には備前堀（備前堤（忠次の官名）といった現役の水利施設がたくさん残っています。

忠次は大きく蛇行していた原野谷川と太田川（前頁図1参照）をほぼ直線化し、この二つの川を合流させたのです。さらに仕切った川をため池として利用し、周辺や下流の村々の用水としています（図3参照）。



今も残る旧原野谷川の跡

浅羽大囲堤

続いての改良は大堤防の築造です。

この地域には「延宝の高潮」（一六八〇年）と呼ばれる大惨事が伝えられています。このときの死者・行方不明は三百人とも四～五千人（『長溝村開発由緒書』）とも言われており、民家六千軒が流されたというも伝承もあります。大水害でした。

当時の横須賀藩主であった本多利長は普請奉行の柳原十内に命じ、領内である浅羽をぐるりと取り巻く延長十四キロの大堤防を造らせ、松も植えて道路として整備します（図3）。

この浅羽大囲堤は昭和の土地改良事業によって次々と姿を消してゆきますが、近年までところどころにその痕跡が残っていました。

余談ですが、この工事は長溝村（袋井市長溝）で中断されています。藩主の本多利長が「領内の政事よろしからず」という理由で改易されてしまったからです。

柳原十内は「十内圦」など領内の整備に大きな功績を残していますが、大囲堤築造の中止の命を受け堤の上で切腹したと伝えられています。

浅羽の掟杭堤

この大囲堤は確かに高潮被害の防止には効果的でしたが、その後の浅羽地区の大きな紛争の種となります。

浅羽の中ほどには「中畦堤」という東西に伸びる小さな堤防があり（図3参照）、この堤を境に上輪の村・下輪の村と分かれていました。この堤によって下輪の村は上流からの洪水を防げましたが、田や飲料水の水源を失うことになります。

対して、上輪の村々は水の便は得ても、この中畦堤があるため常に悪水（排水不良）に悩まされ続けることになります。

したがって、この堤の存在をめぐっては、過去に何度か争いがあり、江戸での裁判を仰いでいます。堤の高さは上流の集落と同じ高さになるよう決められ、堤防沿いに高さを記す二六本の杭が設置されました。以来、この堤は「掟杭堤」と呼ばれるようになりました。古くなった杭の取替えは、十二年ごとに上下集落の代表が集まり儀式のように厳密に行われました。

昭和二十八年の水路工事で「掟杭堤」を取り払うことになった際にも、数百年という伝統を破るものとして紛糾し、新たな覚書を交わしています。

「私ゃ しがない浅羽の娘
化粧するにも水がない」
「奉公するにも浅羽はおよし
浅羽早起きはねつるべ」

浅羽地方は「浅羽一万石」と言われるほどの米どころでしたが、こういう農民の過酷な労働で支えられていたのです。

命山

図3には浅羽大囲堤の外に二つの村が描かれています。大野村と中新田村。地形的に堤防の内側に入れるのは無理だったのでしょう。

「延宝の高潮」で大水害をこうむった二つの村は、独力でそれぞれの村に大きな人工の山、通称「命山」を造ります。

袋井市湊に残る大囲堤の跡

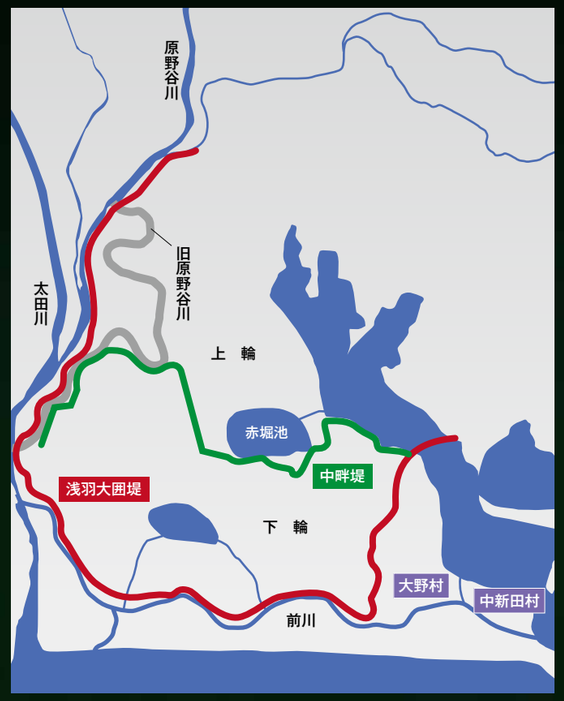


図3：1686年に描かれた古図による浅羽の推定図
（参考：浅羽郷土資料館・近藤記念館のパネル）

大野命山は高さ三・五mの長方形で、頂上には二七〇人が避難可能。また、より海に近い中新田村の命山は高さ五m。頂上には一三〇人が確保できたとのことです。

その後の高潮では命山に避難し、舟で対岸の横須賀から食料を運んだり、潮が引くのを待ったりしたことが記録に残っています。

◇

いずれにせよ、平野下流に生きる農民は、何百年にわたって筆舌に尽くしがたい苦難を強いられてきたのです。

大野命山

【第三章】

水利の限界

進まなかった中世の新田開発

では平野の上流部はどうだったのでしょうか。

太田川、原野谷川周辺には千三百年前の条里制区画がつい近代まで残っていました。

当時は条件のいい水田だけが選ばれました。水路を造る技術が未熟だったため、洪水の起こりやすい大きな川の周辺を避け、小さな川の近くの土地が選ばれたのです。

原野谷川

ところがこうした古代に優良であった水田地帯は、全国どこでも後になると水不足に悩まされるようになります。

人口が増えると水田も増えてゆき、小さな川では田に引く水量が足りなくなり、水争いが頻発するようになるのです。

平安時代も後半になると荘園開発が盛んになってきます。全国的に見れば新田開発が盛んになった時代ですが、遠江では、右のグラフのように水田面積は減っています。

遠江における水田面積の推移（ha）
出典：『大地への刻印』

川の水量の限界や、洪水などで農地が流されてしまったことも影響しているのでしょう。

水不足や水害の直接的な記録はなくても、数字は正直にこの地の開発の難しさを物語っています。

江戸時代の新田開発

前グラフが示しているように、農地面積が激増するのは江戸時代に入ってからです。これは戦国時代が終わって平和になったことや、築城や鉱山開発などの土木技術が発達したせいでしょう。この袋井でも中規模な用水が開削されていきます。主な用水を挙げてみます。

◆大井用水
慶長年間（一六〇〇年前後）開削。十八ヶ村。四二八町歩を潤す。

◆仲井用水
一六七三年頃の開削。五ヶ村、八五町歩を潤す。

◆山名用水
一六八八年開削との伝え（井塚尊）。八ヶ村、二七八町を潤す。

◆諸井用水
開削年は不明。上浅羽一帯の五五五町歩を潤す。

◆富里用水
延宝年間（一六〇〇年代後半）の開削。西浅羽の五二〇町歩を潤す。

水利調整の限界

左頁、図4は、この地における明治の頃の取水地点を示したものです。

通常、磐南のように平坦で広い平野になると藩の事業などによって大用水網が築かれます。北陸の越前藩は九頭竜川に八ヶ所の堰を設け、三十二万石の大藩を維持してきました。また、尾張藩は木曽川から三ヶ所で取水して六十二万石の広大な平野を潤していました。日本一広大な関東平野も基本的には葛西用水と見沼代用水の二本だけです。

しかし、この地方の用水はほとんどが簡単な圦樋ばかり。しかも数本の小河川から実に三〇ヶ所で水を分かち合ってきたのです。

大規模な水利開発が行われなかった理由としては、領地が天領、旗本領、地元の大名領と入り乱れていたことが挙げられます。

しかし何と言っても、大用水網を造るには川の水が少なすぎ、土地が平ら（あるいは凹み）すぎていたことが原因でしょう。

激しい水論

大井、仲井、山名といった比較的大きな用水でも水争いが多く、おびただしい記録が残っています。

また浅羽地区でも、闇夜に上流下流とも竹槍で武装した農民数百名が向かい合うなど、水争いは毎年のように起きています。奉行所の評定には十数年を費やした争いも少なくありません。

この事態は明治になってからでも一向に進展しません。中井用水組合五ヶ村では明治年間、鍬、鎌、竹槍などを手にした農民が結束して上流の村を襲い、警官が動員されるということもたびたび発生しました。日照りが続けば大勢で川に土俵を入れたり、取水口に嵩上げの板を設置したりします。

大雨ともなれば夜中でも、豪雨の中で川に飛び込んで引き上げるという命がけの作業が繰り返されてきたのです。

敷地川

もはやこうした大地や自然による束縛、あるいは幕藩体制という制度の矛盾は限界を超えていたのでしょう。その矛盾の解決に国をあげて挑んだのが明治という時代でした。

幕末から明治維新にかけて、日本のあちこちでマグマのような時代のエネルギーが噴出します。

そしてここ袋井は、沼地とも湿田とも定かならぬ劣悪な農村から、あろうことか日本中の農村の手本となり、国の農地近代化の先駆けとなるという並外れた業績を成し遂げた男を生むことになるのです。

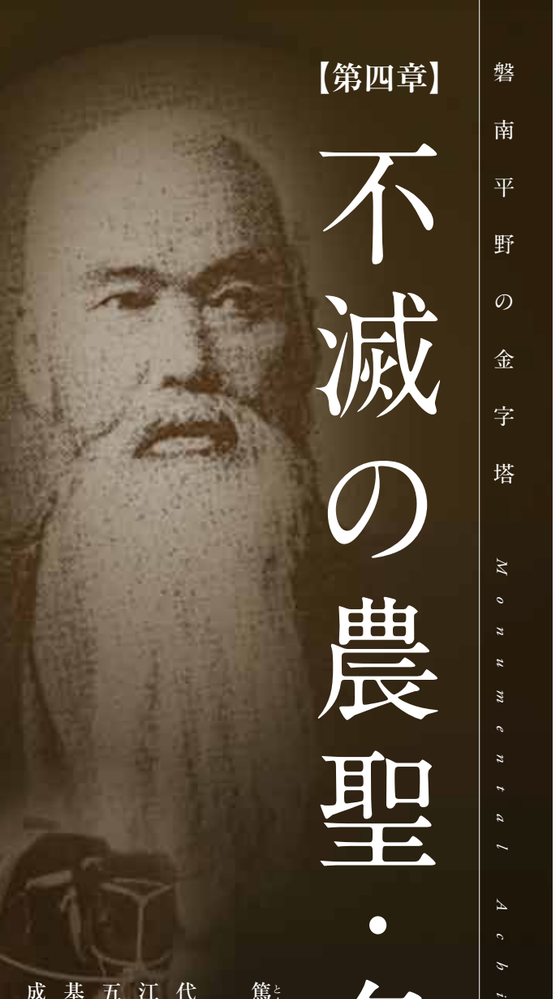
◇

図4：在来用水取水位置図（『新磐田用水誌』より）

【井塚尊】（袋井市小山）

元禄元年（一六八八）頃、小山村の名主・大場九左衛門は、周辺の村々の妨害にもめげず、太田川からの水路を開削。完成するや「村人に迷惑をかけた」と責めを負い、掘った穴に入定（即身成仏すること）。念仏の鐘は七日七夜鳴り響いたという。この井塚用水（山名用水）は八ヶ村の田を潤し地域一の良米を生んだ。後に明治、昭和の工事の際にもこの水路の道筋は変更されることなく、地元の人たちはその偉大さを称え、入定した地に「井塚尊」の碑を建立。毎年、供養祭を続けている。

【第四章】不滅の農聖・名倉太郎馬



彦島報徳社の結成

耕地整理の租・名倉太郎馬は「新池 彦島 松袋井 雨が三粒 降りゃ花筏」と唄われた赤貧地帯の出身。幕末は凶作が続き、あちこちで一揆、打ち壊しなどが発生、彦島村も借財が三〇〇〇余円に達するなど貧困の極みにあったのです。

この三村は伊奈忠次による太田川・原野谷川の合流の犠牲になった地域とも言えそうです。三村とも両川に挟まれて合流する地点にあり、Vの字のように広がった上流地域の水が全部集ってきます。中央を流れる蟹田川は放流先である太田川より水位が低く、この地で大きく蛇行し、毎年のように氾濫を繰り返していました。村人はことごとく怠惰におちいり、働く気力すらなく借財を重ねるという有様でした。

しかし、成人した太郎馬は家財を建て直し、牛耕を試みたり、二宮尊徳の「報徳思想」を実践したりする篤農家に成長します。

明治三年、三十歳の若さで百姓総代。村の救済のために派遣された遠江国報徳社*などに指導を仰ぎ、同五年、自分と有志の耕地、米などを基本財産とする「彦島報徳社」を結成、社長に任ぜられます。

そして遠江国報徳社の指導者から教わった筋植えを生かすために、自分の水田約五反（〇・五ｈａ）の曲折した道路、畦畔（アゼ）を改良し、直線状の水田区画にしたのです（図8上図参照）。

西島報徳社の報徳訓
出典：『磐田の記録写真 第二集 磐田の産業』

全国初の耕地整理

この効果は絶大でした。直線化することによって耕作がしやすくなり、用水や排水がスムーズになる。除草作業がはかどる。風通しが良くなり病害虫の被害が減少、肥料の分解が進むため作物の成長が良くなる。肥料や収穫の運搬が楽になる。むろん収穫も向上。これを見た村人は驚き、翌六年から彦島村全域四四町歩の耕地整理が始まります。

太郎馬は同時に蟹田川の改修に乗り出します。自ら測量し計画案をまとめ浜松県庁の許可を受けます。川幅を広げて掘り下げ、放流先を四キロ延長して太田川から原野谷川に付け替えるという工事を自らやり遂げたのです（明治八年）。これでこの地の水害は激減しました。

河川改修や道路改良といった公共工事と土地改良（農地の交換など地権者の調整を含む）を一体的に行った例は全国でも初めてでした。

飛びぬけた先進性

この頃はまだ刀を差した侍がいた時代です（廃刀令や武士の廃止は明治九年）。神風の乱や西南戦争で世の中は騒然としていました。さらに言えば、太郎馬が耕地整理を始めた年はまだ農民が年貢を納めていた頃です（地租改正は明治六年）。そうした中にあって太郎馬の、現代にも通用する近代的な合理精神には目を見張るものがあります。

ちなみに、石川県の耕地整理の祖と言われる高田久兵衛が始めて田区改正を行なったのは明治二十年です。西洋の土地整理法が初めて我が国に紹介されたのが同二十一年。

太郎馬の手法は明治二十年、富岡村（現磐田市）の鈴木浦八によって改良され、静岡式耕地整理として全国に広がってゆくのです。

そして、耕地整理法が制定されるのが同三十二年。その頃には彦島他五ヶ村が合併した田原村全域、二八五町歩という広大な農地の耕地整理に取り掛かっていたのです。（完了は同三十六年。図8下図参照）。

偉大なる業績

太郎馬が行なった仕事は耕地整理だけにとどまりません。彼は百姓総代、村長、村会議員、勧業委員、社山疏水工事（後述）の議員などの要職につき、寝食を忘れるほど地域のために尽くしました。

まず二宮尊徳の報徳訓を広めて村人の生活改善を指導、貯蓄や副業（縄ないなど）の奨励、資金の貸付なども行い、児童の教育として彦島に分校を設置、自ら教師を務めています。

さらに各地の老農に指導を仰ぎ、筋植えや牛馬による深耕、堆肥作り、塩水による種もみの選別、短冊苗代など新しい農法を村人や近隣に広めました。また太郎馬は駿河、伊豆、甲府や千葉などで学び、先進地の養蚕事業（蚕による生糸の生産）を導入しています。

太郎馬のおかげで村の農業生産はようやく安定することになり、借財三〇〇〇余円をすべて返済、なお八〇〇円の積立金を得ました。村人の生活は立ち直り、租税を滞納するものもいなくなりました。

後に旧河川敷の約一ｈａを農地にしたり、一キロ以上におよぶ新規の堤防も築造したりしています。また同十七年頃には世の中がたいへんな不景気であったことを、彦島の農民は誰も知らなかったといいます。

◇

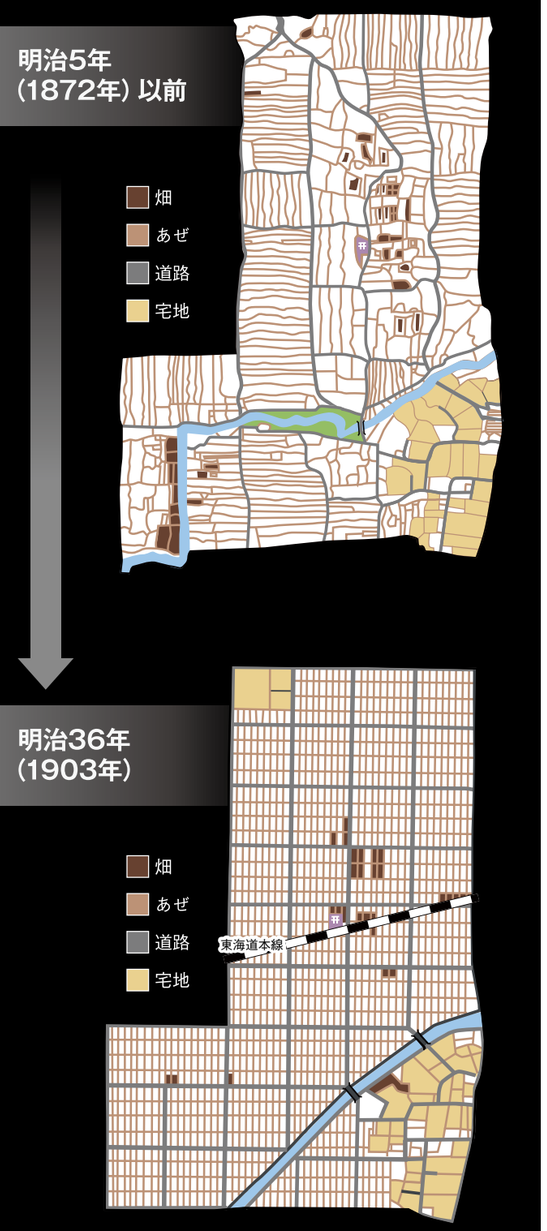
農業の近代化には二つの側面があります。土地改良（水路や耕地整理などのハード的整備）と営農（耕作法、品種改良、経営などのソフト的進展）。太郎馬は、日本の近代化に先駆けて、この両面を成し遂げたのです。袋井が生んだ偉大なる農聖と言うべきでしょう。

そして、この太郎馬の時代と平行して、磐南平野は巨大な土地改良のプロジェクトに挑戦しようとしていたのです。

*報徳社……江戸時代末期、二宮尊徳により設立された農民扶助を目的とする相互融資機関。農民の自立を目指す結社として、尊徳の死後も各地に設立された。

今も当時の耕地整理の面影が残る彦島の水田

図8：彦島の農地の変遷



【第五章】

明治の悲願・社山疏水

謎の偉人・犬塚祐一郎

天保の大飢饉が始まる二年前（一八三一年）、ある人物がこの地域（中泉代官所）に赴任します。名は犬塚祐一郎。現代風の名前ですが、幕府の役人であり、役目は天竜川や仿僧川の工事でした。

草崎村（現磐田市）周辺は土地が低く彦島にも劣らぬ洪水地帯でしたが、彼はこの地の水を仿僧川へ流す排水路（蝦島水道）を造り、悪夢であった毎年の水害から救っています。

また、天竜川に大堤防を造り、河川敷の新田開発や両岸の水防組合など、大きな業績を残しています。そのおかげかどうか、この地域では天保飢饉についての記録は少ないようです。

もうひとつ彼はこの地にとてつもない置き土産を残しました。

祐一郎は磐南平野の地形を調べ上げ、太田川・原野谷川の水量では絶対的に水が足りないことを確信します。そして測量調査の結果、平野最北部にある社山に隧道（トンネル）を掘れば、天竜川の水を引くことが可能であるという結論に達し、計画書をまとめあげたのです。

この時代に、山を越えて天竜川の水を引いてくるという破天荒な着想。まさしく天才の所業です。

彼は地元の人々を説得して回ったようですが、時期が早すぎたのか、実現は見送られました。

しかし、彼のこの案こそが、磐南平野に浮かんでは消え、消えては浮かび、およそ一世紀半の長きにわたって農民を喜怒哀楽で激しく揺さぶり続けてきた見果てぬ夢 ——「社山疏水計画」でした。

犬塚祐一郎紀功碑

新用水路開削願

社山疏水

祐一郎の置き土産は、磐南平野に深い衝撃を与えました。

幕末に数村の有志が計画案を幕府に上申。数年の後にようやく許可を得ますが、明治維新であえなく消滅。これが最初の不運でした。

続いて明治六年、当時の浜松県令などが地元有力者を集めて推進を図り、社山開削の案を県に出願します。しかし、同九年、折り悪く浜松県は廃止。同時にこの案も立ち消え。

明治十一年、足立孫六（後の周智郡長）らが調査をすすめ、計画書を郡に提出。しかし、郡区が変更になり、これもまた流産。

この社山疏水は、天竜川の神田（現磐田市上野部）に石製の水門を築いて取水し、寺谷用水の既設水路で導水、途中で分水してから社山隧道で磐南平野へ引くという計画でした。したがって、寺谷用水との共同事業になるため、どうしても寺谷用水との協議が必要でした。

社山

寺谷用水旧取水口の碑

平野重定公墓所（豊田町加茂 大円寺）

四百年の歴史を持つ寺谷用水

寺谷用水の開設は戦国時代。当時、遠江国は徳川家康の領地でした。家康は伊奈忠次に治水や新田開発を命じます。忠次は用水の計画を立て、地元の武将であった平野重定に工事を託します。

一五八八年、重定は天竜川沿いの寺谷村に巨大な圦樋を設置。浜部（現磐田市浜部）まで約一二キロにおよぶ大用水を造ったのです。

しかし、名にし負う天下の暴れ川・天竜——七〇一年から昭和五十六年までの二八〇年間、記録に残る災害は二一八回（一・三年に一回の発生率）という凄まじさです。

洪水のたびに大量の土砂が堆積し、流路を変え、水量も著しく変動。このため、寺谷用水は取水口の補強や補修、導入路の掘削など過大な労苦を強いられ、取水口も何度か移っています。

したがって、寺谷用水にとっても、神田に頑強な水門を造り、安定した水量を確保することは悲願でもあったのです。

世紀の大事業への挑戦

犬塚祐一郎の案より約五〇年後、この計画は実現性を帯びてきます。

明治十六年、足立孫六は全区域（袋井宿他七〇村）をとりまとめ、県を経て内務省の許可を得ます。

ちなみに、この時代は日本三大疏水と言われる安積疏水、那須疏水、琵琶湖疏水と国家の威信をかけた大事業が目白押しでした。

最も難工事であったのは社山隧道（約一、三〇〇m）。予想以上に地質が軟弱であり、全部を石畳に変更するなど予算は膨れ上がります。

国や県から助成を受け、その後、工事は順調に進みましたが、同二十年、奇妙な噂が流れます。「設計に誤りあり、水は流れて来ず」。

組合には苦情が殺到、脱退する地区も続出。工事は完全にストップします。

県が調査したところ、やはりミスを発見。隧道の出口が数m高すぎたとのこと。設計は内務省でしたが、考えられない失態です。

組合は議論百出、罵詈雑言が飛び交い、まったく収拾のつかない混乱を招きます。しかしいくら言い争ってもいかなる解決策も出ず、同二十一年八月、断腸の思いで工事の中止を決議。

農業土木史上最悪の失態とも言えるのではないでしょうか。

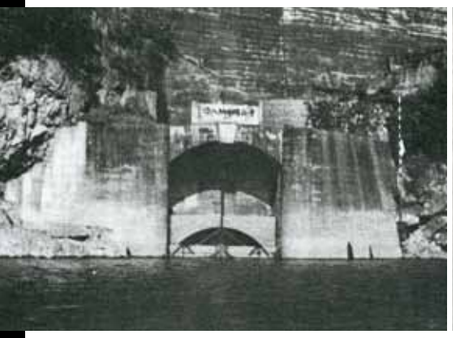
翌年、大日本帝国憲法が公布され世の中は沸きあがっていましたが、この平野は暗澹たる空気に包まれることになります。

◇

この頃、巷では、誰が作ったのかこんな唄が流行りました。

「社山 山のキツネにだまされて
金は出したが水はコンコン」

旧社山隧道



神田取水口

【第六章】

執念の磐田用水

悪夢からの再起

社山疏水は悲惨な結果に終わりましたが、唯一の成果は神田取水口の完成によって寺谷用水の用水量が安定したことでした。

暗然たる気分の覚めやらぬ明治二十六年、この平野は未曾有の干ばつに襲われます。収穫皆無という村が続出。

地元の必死の要請を受け、県は再び測量に着手。しかし総工費は三一万二千円という巨額にのぼります。国の直営事業・安積疏水の総工事費が約四〇万円ですから地方でまかなえる額ではありません。

明治44年8月の豪雨による東海道本線崩落（井通村）
出典：『磐田の記録写真 第二集 磐田の産業』

それでも諦めきれない人々は数年後にも県に調査を依頼。工事費はインフレによって実に五〇万円にまで跳ね上がります。

明治の大洪水

さらにこの地方を決定的に打ちのめしたのは明治四十三年、四十四年と続いた古今未曾有の大水害でした。世に言う関東大水害（死者二七〇〇余名）。

四十三年の洪水では、堤防決壊二一〇ヶ所、十数の町村が濁流に飲まれ、翌年の豪雨では破堤七三〇ヶ所、広大な流域一帯が一面の泥沼と化し、人々を恐怖と絶望のどん底に落します。

これを期に行政の事業は一気に河川改修へと転換して行きます。

しかし、利水と治水は矛盾するのが常。川から水を引きやすくすれば堤防は弱くなり、堤防を頑強にすれば取水が困難になる。河川改修の結果、渇水が起こりやすくなり、河床も一mほど低下、各地区では取水に著しく支障をきたすようになったのです。

寺谷用水の苦悩

社山疏水の最大課題はその巨額すぎる工事費でした。しかし、この頃、水力発電の水を用水に使うという案が浮上します。これなら工事費も分担が可能です。財界からも構想が立ち上がりますが、やはり経費の問題が立ちはだかり、夢は、はかなく費えてしまいます。

一方、一生を治水に捧げた天竜の巨星・金原明善の献身的事業などにより天竜川の河川改修が飛躍的に進みます。それで困ったのが寺谷用水。川の流身が移動し、神田取水口の取水量が不安定になったのです。このため毎年のように水の確保に苦しめられるようになります。

執念の再出発

悲壮な決意を胸に秘め、大橋亦兵衛らの県会議員が中心となり寺谷用水と旧社山疏水地区の同盟会を結成します。これには浅羽の用排水改良事業（用水改良とポンプ灌漑）が大きな刺激となりました。総費用の二分の一が国庫補助の対象となったのです（大正十五年完成）。

旧社山疏水地区も水利組合を結成。最も困難な利害調整を行なう主事には人望、胆力とも抜きん出た江塚勝馬が迎えられます。いよいよ県議会にて磐田用水幹線改良事業が可決。昭和四年の出発でした。

最初の難関は寺谷用水との協議でした。課題は費用の分担率など。協議は毎回明け方近くまで続き、時に席を蹴るなど激しく決裂。七回目にしてようやく打開策が締結します。

すでに用排水改良を終えた浅羽に参加を強いるのも酷な話。また用水に不足はなかった三川地区も不参加を固辞して譲らず。その他数々の難問を乗り越えて着工式を迎えたのは出発から四年後の昭和八年。世の中が満州事変、国際連盟脱退などでキナ臭くなっていた時代です。

次々と立ちはだかる戦時下の苦難

阿蔵（現浜松市天竜区）に取水口を建設、やがて因縁の社山隧道も完成。残るは長大な幹線水路網の開削です。

国庫補助も決まり、いよいよ軌道に乗るかと思えた矢先、日本は太平洋戦争に突入。大不況に加え資材不足、物価高騰。工事はまったく停滞という最悪の事態を迎えます。

唯一の打開策は事業を農地開発営団*1に移管することでした。関係者は猛烈な攻勢が実ってようやく許可が下りたものの地元負担金は一八万二千円。とうてい払える額ではなかったのです。

この絶体絶命の窮地を救ったのが故金原明善翁の金原治山治水財団でした。しかも全額寄付という今日では考えられない義挙。

さらに最後の苦難が立ちはだかります。戦局は悪化の一途をたどり、いよいよ資材、労働力の確保が尽きてきたのです。

天竜川から初めて通水された用水（昭和19年）

しかし、農商務省の竹山祐太郎（後の静岡県知事。国営天竜川農業水利事業に尽力）の計らいで、秋田、新潟他、総勢二、五七六名の農業増産報国隊*2が一〇日間で八キロの幹線水路を掘りぬいたのです。

涙の通水式

「来た、来たー、天竜の水が来たーっ！」昭和十九年七月、遂に磐田用水は完成。感動の通水式を迎えます。

式典では金原財団の鈴木信一理事長が小瓶を取り出し、天竜の水を入れます。「この水を金原翁の墓前に捧げ、今日の磐田用水通水の成功を報告したい」。参加者全員が感涙にむせんだ一瞬でした。

◇

あらゆる困難に耐え抜いて地元をまとめてきた磐田用水東部水利組合主事・江塚勝馬。文人でもあった彼は石碑に一句刻んでいます。

「水滾々　七千町歩　豊の秋」

「金は出したが水はコンコン」と嘲られながらこの世を去った明治の先人たちへの、あらん限りの感謝を込めた返歌でした。

農業増産報国隊の工事

*1 農地開発営団……戦時下の食糧増産を目的に創られた特殊法人。
*2 農業増産報国隊……食糧増産のため、農村の一八～二五歳までの青少年を部隊に編成し、耕作放棄地などにあたらせた組織。

阿蔵取水口

【終章】

磐南平野の金字塔

この事業の完了は昭和二十二年、ついに磐南平野は千年と続いた地形的宿命を克服し、歴史上初めて尽きることなき豊流天竜川の水を得ることになるのです。

しかしそれも束の間、戦後の経済成長に伴う電力需要の増加によって天竜川上流には次々と発電ダムの建設ラッシュが始まります。川の流量や流身が激しく変化し、阿蔵取水口も用をなさなくなってきます。

真に磐石の水利システムが出来上がるのは、発電、工業水、上水道など天竜川の総合開発事業により船明ダムからの直接導水が可能になる国営農業水利事業の完了（昭和五十九年）。実に犬塚祐一郎の社山疏水案から百五十年の歳月が流れていたのです。

第一章で述べたように、今の磐南平野は県下一の穀倉地帯。洪水からも渇水からも解放され、用水も滞りなく配水されています。

しかしと言うか、ゆえにと言うべきか、こうした先人たちの偉大なる業績もいつの間にか風化し、もはや、水は空気同様あって当たり前、洪水はなくて当たり前。先人たちが命をかけて守りぬいてきた水田も、ともすれば社会に軽んじられ、見捨てられようとすらしています。

そのことを見抜くかのように江塚勝馬は『磐田用水誌』（昭和二十七年発行）にこう記しています。「最初に見た処女水のみが尊いのではない。数百年後にこの用水路を流れる水にも、これを引くために創業時代の関係者の血と汗と涙が溶け込んでいるのである」。

金字塔とはピラミッドのこと。転じて不朽不滅の業績を意味します。ピラミッドは確かに古代の偉大なる建造物ですが、王や貴族の墓にすぎません。しかし、名倉太郎馬や社山疏水を築いてきた先人たちの業績は、今もなお何十万、何百万人の命を救い、養っているという意味においてピラミッドをはるかに超える資産であり、真の意味で金字塔と言えるのではないでしょうか。

決して忘れてはならないこと ―― それは、私たちの住んでいる磐南平野は先人たちが命をかけて築いてきた水路や堤防（歴史的資産）によって支えられている人工の大地であるということです。

したがって、もしこの水路が地震などで破壊、あるいは老朽化すれば、私たちはたちどころに明治の頃の農村に戻ってしまうのです。

近年、山は荒廃し、生き物も次第に少なくなり、食糧危機や石油の枯渇が危ぶまれています。

歴史を学ぶことは、今を知り、未来を創ること。

聖徳太子の頃から見ると、あらゆるものが変わりはてました。貴族も武士もいなくなり、馬が走った道を無数の車が走っています。飛行機、新幹線、コンピューター……。

しかし、奈良時代の昔からほとんどその姿を変えずに存続してきたものもあります。 ―― 寺社と田畑。

私たちが生きる、あるいは次世代が生き延びるための真の資産とは何でしょうか。

先人たちが成し遂げたこの偉大なる業績に思いを馳せつつ、そのことを皆で考えようではありませんか。

―― 磐南平野が豊かであるうちに。